ミネソタ通信

第 11 号
2015 年 5 月　日本ミネソタ会発行

目次

１、「ご挨拶とご報告」　　会長　岩波はるみ
２、「日本人会事始め」　　沼形義彰
３、「日本ミネソタ会発足の頃」　　遠山紘司
４、「『ミネソタ好き』」　　山下宏
５、「ミネソタとの 30 年」　　福田弥夫
６、「次世代のための新たな枠組みづくり」　　副会長　中村旭
７、「ミネソタ大学ミュステンハウザー先生のご逝去の報」　　会長　岩波はるみ
８、「編集後記」

―＊―

１、ご挨拶とご報告

日本ミネソタ会　会長　岩波はるみ

お蔭様で、日本ミネソタ会は 2014 年 7 月に設立 30 周年を迎えました。昨年 6 月 25 日、新宿三井クラブにおいて開催致しました 30 周年記念パーティでは、諸星裕先生をお招きして、ミネソタにまつわる楽しい御講演を伺うことが出来きました。そして 1984 年の設立当時の世話役や幹事の方々から、今年ミネソタに留学される若い学生の方まで、大勢の皆様にご参加頂きました。心から御礼申し上げます。

日本ミネソタ会では、例年の行事となりました花見会やクリスパスパーティーの他、若いメンバーが企画運営する Minnesota Youth Seminar も昨年からスタート致しました。これらのイベントを通じて、皆様がそれぞれのお仕事、ご研究、日常生活においても、活発に御交流して頂ける「機会の提供」に今後もはげんでいきたいと存じます。

さて、このたびは、「ミネソタ通信 11 号」をお届けいたします。創刊号は 1990 年 6 月の発行でしたので、本年 2015 年は創刊 25 周年にあたります。これまでの「ミネソタ通信」を読み返してみますと（日本ミネソタ会のホームページ上で可能です)、毎号様々なエッセーや記事が寄せられ、書き手の皆様の想いや当時の様子が伝わってまいります。「ミネソタ通信」には「記録」としての価値と意義があることを思い知らされる次第です。そして、日本ミネソタ会のイベント等の活動が東京地区中心に偏りがちな中で、「ミネソタ通信」は日本全国にいらっしゃる日本ミネソタ会をご支援くださってきた皆様に、その活動内容を伝える役割を果してきたことに気づかされます。

「ミネソタ通信」はこの 11 号から、長らく編集責任者を務めてまいりました山口健一副会長にかわり、深井浩史幹事が編集長に就任いたしました。また今秋ミネソタに留学する竹下美奈さんも編集委員として加わりました。皆様にとって、心に残る「ミネソタ通信」がお届けできれば幸甚です。

―＊―

２、日本人会事始め

沼形　義彰

1976 年 7 月にミネアポリスに到着し、ＵＭＮの英語クラスを受講した。
同窓の三浦、岩崎両君とはすぐに親しくなり、小生が借りた 7th University Ave.
のアパートで夢を語り合った。
76 年当時のキャンパスは、75 年 4 月にサイゴンの陥落で幕を閉じたベトナム戦争の影響はあまり感じられず、フォードとカーターの大統領選挙に関心が集中していた。
両者の Debate を中継するＴＶを学生に交じってみていたものの、ジョージア出身のカーターの南部訛りの英語は全く聞き取れず、先が思いやられた。
知名度の低いカーターが勝ち、地元のモンデール副大統領が誕生することでキャンパスも沸き返った。
73 年に始まった石油危機でトイレットペーパーの買い占め、東京タワーのライトアップや深夜放送の中止などを東京で経験してきた身にとっては、氷点下の外をよそにＴシャツ 1 枚で暮らせる内のエネルギーリッチな現実に唖然とするばかりでした。

暮がちかづくと、クリスマス会を開く計画が持ち上がり、ミネソタ暮らしの長い清水さん、西田先生、伊藤先生、着任直後の遠山先生と連絡がつく学生や家族等 20 名程が集まり、
ミネソタ日本人会の名乗りをあげました。
会場を飾ろうと生花を買ってきたまではよかったのですが、一晩経つと水分がすっかり抜けて押し花状態に変貌しました。

76 年の冬は記録的な寒波で、昨年 11 月の新聞記事では、「アメリカで 1976 年以来の記録的大寒波，摂氏マイナス 40 度」と報じられました。この記録も今年 2 月の寒波で破られたようですが。
当時もＮＹのハドソン河が凍りつき、ヒートオイルの輸送が止まって社会問題となりました。
小生も暮に呼び寄せたワイフと８歳と５歳の娘を連れて 77 年の４月に Duluth にドライブしましたが、その時の写真にＴシャツ姿の後ろに氷山が写る風景が残っています。
厳冬が過ぎてのミネソタの初夏の華麗さは皆様ご経験のとおりです。

40 年昔に名乗った「ミネソタ日本人会」のその後の消息をご存じの方がおられましたら教えてください。
現在のミネアポリス日本語補習校のＨＰを見ると、高校生までの 200 人程が在学しているようで、当然ＰＴＡ等の活動はあるかと思いますが、キャンパスの内外で日本人会的なものがあれば、活動を知りたいものです。

―＊―

３、日本ミネソタ会発足の頃

遠山紘司（放送大学客員教授）

日本ミネソタ会発足 30 周年おめでとうございます。本会の発足に関わった者として「よくぞここまで！」という思いと同時に、今後どのように発展していくのだろうと夢が膨らむこの頃である。
今回は 30 年前の手帳を見、思い出しながら、発足の経緯、名簿作成と総会、ミネソタ通信等について記したい。

私がミネソタ大学へ postdoctoral fellow として勤務したのは 1976 年（昭和 51 年）10 月から 1978 年９月までの２年間であった。帰国後、翌年から「アメリカ生活事典」の出版準備に取りかかり、日曜日と夏休み等の休暇をフルに使って２年後の 1981 年に出版の運びとなった。その間にアメリカ各地に留学されたたくさんの方々にお会いして、多くの大学の卒業生等が日本に同窓会組織を作って活動していることを知った。
本の出版を期に「ミネソタ大にはそのようなものがない、ミネソタ大学日本同窓会」を作りたいと考え、ミネソタ時代の同期で日本大学に勤務しておられた西田　司氏に相談をした。しかし、私がその直後の 1982 年４月から１年間マレーシア政府へ出張となったため、ミネ

ソタ会の立ち上げは宙に浮いた形になってしまった。

1983 年帰国後、改めて西田氏に「ミネソタ会を作りませんか」と持ちかけ、「何をするのか」「何のために作るのか」「会員の範囲は」等を話した。最初「ミネソタ大学の同窓会」を念頭に考えていたが、ミネソタには３Ｍをはじめハネウェル等の企業にも多くの日本人の方がおられたので、「あの厳しい寒さを体験・共有したもの同士ならきっと共通の話が弾むだろう」との想いのもとにミネソタ大学の枠を取り「ミネソタに住んだことのある人、ミネソタに興味のある人」ならどなたでも、ということになった。

次は組織を作ろうということになり、西田氏が知っておられた明治大学の沖田哲也先生を駿河台に訪ねて趣旨をお話したところ「ミネソタ大学の同窓会は３つ４つある、関西にもあるがいずれも別々に行動しておりまとまったものはない」ということで、本会の設立に協力いただくことになった。会の名称を「日本ミネソタ会」とし、翌年（1984 年、昭和 59 年）には総会を開こうということになった。それまでに、発起人を集める、会長を決める、名簿を作る、総会会場を探す等問題山積であった。総会の目的は第１回目だから集まることに意義がある、ということにした。1984 年１月に再度、集まることにしてその間に西田、沖田両氏から知人名簿を頂き仮名簿を作った。60 名程度のものであったが「なんとか発足できそうだ」という感触がつかめた。１月末、再度３人で集まり名簿の中から発起人候補を６名決めた。会長になっていただきたい方として候補に挙がったのが中村正吉氏であった。

横浜のご自宅に中村さんを訪ねたのは２月に入ってからであった。中村さんは、戦後まだ日本がアメリカの占領下にあった 1951 年（昭和 26 年）、470 名の GARIOA 留学生のメンバーとして横浜港から米軍軍用船で約２週間かけて渡米されシカゴで研修を受けた後、偶然ミネソタ大学に割り当てられたとのことであった。ミネソタ会を発足させたいこと、ついては初代の会長に就任してほしいことをお願いした。２年ほど前、会社を定年でやめておられ、時間的にも問題ないとのことで会長就任を快く引き受けていただくことになった。

あとは発会式の日程を決め、会場探し、案内状を出すこと等あったが、３月に発起人の一人伊藤定祐氏と沖田先生、私の３名が集まり日程だけを７月 22 日と決めた。私自身は７月１日付けで勤務先の異動が決まっておりその準備と並行して名簿に沿って案内状を出しているうちに「この人にも案内状を出してください」という嬉しい便りが次々に届き、新しいメンバー候補が増え 100 名近くの名前の並んだ名簿が出来上がり、なんとか開会へこぎつけた。

発起人全員が集まったのは７月 22 日の第１回当日であった。場所は東京港区南青山会館、子供６名を含め 58 名の参加で盛会であった。西田氏の努力でミネソタ州知事、ミネソタ大学学長、ミネアポリス市と姉妹都市の大阪茨木市長からのメッセージが花を添えた。

２年後の第２回総会で規約や会報の発行等を決めたが、会報を出せないままであった。地

方にいて総会に参加できず、会費のみを納入していただく人のためにもと「ミネソタ通信」と名づけて第1号を発行したのは第1回総会から6年後1990年のことであった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

４、「ミネソタ好き」

山下宏

日本ミネソタ会は昨年30周年を迎えましたが、これも歴代会長や役員のリーダーシップのもと会員がこれを支え、ここまで発展されましたことをお祝い申し上げます。

日本ミネソタ会がユニークである点は、第一に、ミネソタ大学留学生を中心に発足しましたが、門戸を広く開放し、ミネソタ州の他の大学の卒業生、ミネソタに在住したことのある人達、日本に進出したミネソタ企業やミネソタにて活躍している日本企業のメンバーを加えていることです。第二に、戦後すぐの留学生のシニアーから現在活躍中の中堅層、最近の留学や在住から帰国した若手まで良いバランスで会員が集まっていることです。第三に、ミネソタ大学の卒業生サポート組織、他の大学の同窓会、アメリカ大使館文化広報部、ミネソタ日米協会など外部団体と連絡をとりあって活動していることです。更にいうならば会員は、母校愛も帰属するミネソタ関連組織への忠誠心もありながら、皆、心からミネソタが好きな人の集まりです。今後も今進んでいる方向にそって、多くのイベントを企画し発展してゆかれることを望んでいます。

さて、私は30年前の1985年から88年まで、勤務先のハネウェル本社で働くためにミネアポリスに住んでいました。仕事がグローバル事業推進担当の副社長でしたので、ミネソタ州貿易局やワールド・トレード・センターなどの会合にも出席し、州の貿易促進や海外投資のサポートもいたしました。その関連で1988年日本での勤務になった時に、州の要請と会社の了解のもとに、ミネソタ州が日本に貿易事務所を開設し、来日したパーペッチ知事から名誉代表を引き受けることになりました。以来アンダーソン知事、ベンチュラ知事と3代の知事のもと、約15年間ミネソタ州関連企業の日本での活動のお手伝いをさせてもらいました。自助努力で日本での活動を支えられる大企業よりも中小企業を支援する機会が多く、時間も努力も必要でした。日本ミネソタ会にも入会させていただき、毎年の総会の時には“ミネソタアップデイト”として州の近況を報告していました。州から知事、副知事その他要人が来日したときは、会と

共同でイベントを催すように努めました。特に印象に残っているのはベンチュラ知事で、元プロレスラーということでどんな人かと思っていましたが、政治家らしくない普通の語り口で、チャーミングな人柄とあいまって、皆を魅了してしまいました。当時民主・共和党からではなく、独立党として大統領選に出馬かとの噂があって、その日本での講演会は大きな注目を浴びました。

この間には、モンデール元副大統領が駐日大使になり、根っからのミネソタ人である大使は州事務所や日本ミネソタ会の活動に理解を示し、常に密接な関係を保てたことは忘れることが出来ません。

記憶に残るその他の出来事としては、秋田にミネソタ州立大学機構がキャンパスを開き、着々と実績をあげるのを支援したこと、大植英次指揮のミネソタ交響楽団の日本公演の手伝いをしたことがあげられます。

州予算の関係で、その後ミネソタ州日本事務所は閉鎖になりましたが、長い間につちかわれた経済的文化的交流の流れは脈々と続いております。

ここまで最近 20 年間にミネソタを訪問しなかった年はありませんでしたが、昨年は初めて訪問が途絶えました。しかし今年は 5 月に再訪する予定で楽しみにしております。

長いミネソタとの関係やサポート活動は、ミネソタが好きだからこそ出来たものと信じています。ミネソタ愛にも先方からも応えていただきました。ミネソタ州名誉市民、ミネソタ日米協会の名誉理事、日米協会からのモンデール賞受賞などは宝物であり、今後も大切にしてゆきたいと思っています。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

５、ミネソタとの 30 年

福田弥夫

1985 年 5 月 24 日の羽田空港は雨でした。中華航空 002 便に乗って私はサンフランシスコへ向かいました。初めて見るカリフォルニアの空が雲ひとつない青空だったのを覚えています。留学先のカリフォルニア大学ヘースティングス法科大学院では、私の引受担当教授であるウイリアムＪ．リガー先生が待っていらっしゃいました。リガー先生はミネソタ大学ロースクールの卒業生で出身はミネソタ州のベンソン。私とミネソタとの最初の出会いでした。ヘースティングスにはミネソタ大学の関係者が複数おられ、リガー先生の研究室に時々集まっていましたが、ある時「ミネソタは一体どんなところでしょうかと」の私の問に、冬は寒

くて「アメリカのシベリア」のようなところだというジョークで盛り上がったのを覚えています。私の第一回目の留学は 1987 年 1 月まででしたが、残念ながらミネソタに行く機会はありませんでした。

ミネソタを初めて訪れることになるのは 1989 年 1 月のことです。当時私は郷里の八戸大学で教鞭を取っておりました。八戸市は「氷都」と呼ばれスケートが盛んです。私も小学生の時からアイスホッケーをしていました。八戸市、八戸商工会議所そして八戸青年会議所が主催者となり市制施行 60 周年の記念事業として、1989 年 5 月に「ピーウィー国際アイスホッケー大会」を開催することとなり、アメリカからはセントポールのジョンソンホークスチームがアメリカホッケー連盟から推薦を受けて参加をすることになったのでした。実行委員会のメンバーの私は、打ち合わせのためにセントポールを訪問することになり、冬の八戸からサンフランシスシスコを経由してミネソタへ向かったのでした。カリフォルニアの青い空から雪のミネソタへ。長い付き合いとなるスティーブ・ヤングハンズさんをはじめ、ジョンソンホークスのスタッフの人たちが空港で待っていてくれました。

ジョンソンホークスチームは、セントポール市の東側に位置するジョンソン高校学区のアイスホッケークラブです。当時はスクワート（9 歳 10 歳）1 チーム、ピーウィー（11.歳 12 歳）2 チームそしてバンタム（13 歳 14 歳）1 チームを擁する大きなクラブでした。驚いたのが会費です。日本では小学生のアイスホッケークラブの会費がひと月 3 万円というところも少なくなく、スケートやスティックはもちろんのこと、ヘルメットからパンツ、そしてグローブに至るまですべて個人で用意します。国産はほとんどありません。上から下までそろえると 10 万円は超えてしまいます。日本でアイスホッケーをやるのはお金がかかります。ジョンソンホークスの方たちと話を始めましたが、クラブの会費のところなどで話がうまく通じません。ミネソタの少年ホッケークラブの運営は私の理解をはるかに超えていたのでした。会費は徴収するにしてもひと月 20 ドル程度。道具はスケートとスティックは個人持ちだが、防具はヘルメット、グローブ、パンツなどの表に出るものはチームが支給。遠征費も基本的にチームが負担というのです。日本は親がかりでなければできない、かなりお金のかかるスポーツがアイスホッケーですが、ミネソタでは誰もができるスポーツがアイスホッケーでした。彼らはミネソタを Hockey Capital in the U.S と呼びますが、高校の学区には屋内のスケート場が必ず一つはあり、日本から見たら夢のような世界がミネソタでした。ジョンソン地区はブルーカラー中心の町で、非行に走る少年も多く、大学への進学は非常に少ないという話で、少年ホッケークラブを運営している目的のひとつが、少年たちの健全育成と大学進学への夢を与えることと聞いて驚いたことを覚えています。そのようなホッケークラブの資金調達の方法を聞いて更に驚きました。プルタブと呼ばれるスクラッチくじで儲けているのだというのです。バーやボーリング場でこのくじを販売し、その収益でクラブを運営

していました。ジョンソンホークスのクラブ運営への興味から、私はミネソタ州法人法の研究を始めることになります。

1989 年から毎年のようにミネソタを訪れていますが、やはり楽しみはアイスホッケーです。ＮＨＬのミネソタワイルズの試合も好きですが、ミネソタ大の試合の方が好きです。ちなみに試合会場は今のマリウッチアリーナよりも Old Mariuch の方が雰囲気的に好きです。特にミネソタ大学対ウィスコンシン大学の試合は本当に面白い。ＭＩＮＮＥＳＯＴＡ Minnesota Minnesota Oh Gophers の応援や、ウィスコンシン大学に対する野次 Cheese Head など。八戸の大会へ参加したマイク・ライオン君は、ゴーファーズの一員となって活躍し、彼の試合を見に行った時のスティーブ・ヤングハンズさんのうれしそうな顔は今でも忘れません。

アイスホッケーの他にもミネソタとの交流は深まっています。サンフランシスコ時代の友人がセントポール市にあるウイリアムミッチェル法科大学院の教授になったこともあり、ミネソタを訪問するときはできるだけ法律の調査（特に法人法と自動車保険法）を行うようにしています。ミネソタ州は時には先駆的な立法をする州でして、法人法の中でも協同組合法は特徴的な構造を取っています。カリフォルニア州やニューヨーク州などと対比させて研究すると非常に面白いのです。ここ 10 年ぐらいミネソタ州協同組合協会を訪問して、最近の動向などを伺っております。

リガー先生との出会いから 30 年。ミネソタ州との関係はアイスホッケーから深まり、専門の法律学の領域へと広がってきました。ミネソタ大学ロースクールのシュワルツ教授とは学会を通じて友人となり、私の「サバティカルが取れたらミネソタ大学で客員研究員として引き受けて欲しい」とのお願いに、「いつでもどうぞ」とのありがたいお言葉です。ミネソタでの冬を楽しみにしているこの頃です。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

６、次世代のための新たな枠組みづくり

日本ミネソタ会副会長　中村　旭

（1990-92年ミネソタ滞在）

昨年2014年に30年の節目を迎えた日本ミネソタ会は、日本の方々とミネソタ州との交流が末永く継続して行くことを願い、次の30年を見据えてこれからを担う若いMinnesotansが各種活動に参加できるよう、新たな枠組み作りを進めています。

この枠組みにおけるフォーカスは、日本ミネソタ会を「若いMinnesotansが集まる場として活用してもらう」ことです。まずは米国からの留学生に、日本とミネソタ、および幅広い世代の架け橋になってもらい、それを受けて日本の若手たちがミネソタ会の豊富なリソースを活用し、自らの成長のためにイベントを企画・運営しています。以下が具体的な活

動です。

① **お花見会の定例化**：ミネソタ大学からの留学生の歓迎会を兼ねて東京・井之頭公園でお花見開催するようになって今年で３年目。ミネソタ大学・一橋大学等における交換留学制度を運営する担当部門との連携もスムーズになりました。今年は４名の留学生を迎え、楽しく日本の春を楽しみました。（担当：松盛さん）

② **ミネソタ・ユース・セミナーの開催**：昨年から、社会人になり間もない留学経験者や現役大学生が主体となって、主に20歳台の方々を対象にしたセミナーを開催しています。第1回は2014年10月4日に３Ｍジャパン（株）の昆副社長、第2回は本年4月に社会起業家をサポートする渡辺奈々さんをお迎えして、講演とディスカッション行いました。この活動を運営する「ミネソタ・ユースの会」は、これから年に2回ほどのセミナーを企画していきます。（担当：祖一さん）

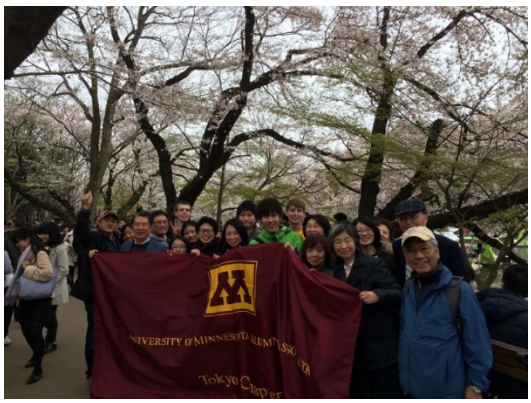
③ **活動資金獲得のオークション主催**：毎年恒例となっているクリスマス会において、「ミネソタ・ユースの会」の活動資金を集めることを目的としてオークションを実施しました。会員の皆様、ミネソタ関連企業からのご好意でたくさんの合計40点以上の出品があり6万円を超える活動資金を得ることができました。頂いたご資金は、日本ミネソタ会が責任を持って管理し、「ミネソタ・ユースの会」の趣旨に沿った活動に利用し、活動内容を広くご報告させていただきます。（担当：武濤さん）

これら活動を通じて、ミネソタ会の運営に若い方々が参加していただく機会が多くなり、活動の活発化、効率化に多大な貢献をしていただいています。この変化に対して、長年ミネソタ会を支えていただいてきたベテラン会員の方々からも、非常にポジティブなフィードバックをいただいております。

幹事一同、今後もミネソタ・ユースの会を力強くサポートしていきます。運営については若い Minnesotans の自主性に委ねつつ、日本ミネソタ会全体としては、ミネソタで勉学・研究・勤務された諸先輩の経験・知識・知恵を幅広くシェアする場としても活用できるような方向性も模索していきたいと考えております。
会員のみなさまには、オークションへのご協力（出品・入札参加）等による活動資金提供の他、講演会講師・コーチング・キャリアサポート等多面的に若い Minnesotans の成長をご支援いただければ幸いです。

本件に関するお問合せは中村（nakamuraasahi@aqua.plala.or.jp）まで。

＜2015 年お花見会＞



＜ミネソタ・ユース・セミナー＞

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

７、ミネソタ大学ミュステンハウザー先生のご逝去の報

日本ミネソタ会　会長　岩波はるみ

2015 年 3 月 14 日、Dr. Joseph A. Mestenhauser が逝去されました。89 歳でした。Mestenhauser 先生は、Director of the Office of International Education, University of Minnesota として、半世紀以上にわたって、ミネソタ大学の国際化に貢献されました。また、国際教育者協議会（NAFSA）の会長として、アメリカをはじめ世界各国の高等教育の国際カを高める活動にも従事されました。現在ミネソタ大学には、国際教育における Mestenhauser 先生の功績を称えた、Mestenhauser Legacy Initiative という奨学金制度がございます。先生は大変な親日家でもあり、フルブライト招聘教授として 20 回以上来日され、日本ミネソタ会では、来日のたびにお招きして、講演や食事会等を行ってまいりました。ご冥福をお祈りいたします。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

８、編集後記

ミネソタ通信第 11 号楽しんでいただけたでしょうか。私自身はまだ学生で今年の 9 月に初めてミネソタに行く予定になっているのですが、今からとても楽しみにしています。今回ミネソタ通信の編集に初めて関わらせていただきました。今後日本ミネソタ会の活動がますます活発になるよう世代を超えて協力していきたいと思います。　　（竹下美奈）